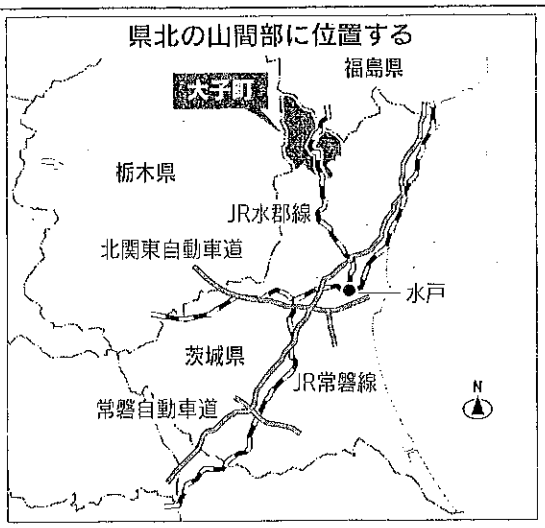
茨城・大子町

山間部に企業 進出着々

茨城県北部の山間部にある大子町がユニークな企業誘致で注目を集めている。廃校をはじめとする遊休不動産の一覧を作成し、格安で貸し出すなどする試みだ。少子高齢化が進み、交通の便も良いとはいえない町に企業が進出し始めた。再生可能エネルギーや農業、食品加工など山間部の特性を生かす事業が目立つ。

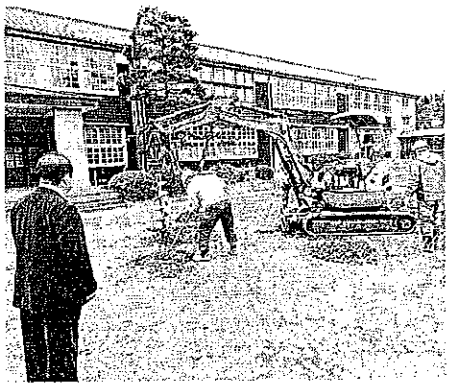


廃校など格安貸し出し

1月中旬。旧黒沢中学校の敷地で重機が動き回る。グローバル・リンク（東京・千代田）がここの木造校舎や運動場、ほかの遊休地も活用して太陽光発電と農業、子供向け教育研修の事業を始める。週に数回打ち合わせで来町する富樫浩司社長（53）は「自然や未利用地が豊富で割安なのが魅力」と進出理由を語る。土地・建物は賃借だが、将来の購入を検討する。

重機が手掛ける工事は出力1000キロワットの大規模太陽光発電所（メガソーラー）を建設するためのもので、3月に稼働する。町内の別の遊休地でも同1200キロワットと500キロワットの発電所を3～6月に動かすなど施設を拡大する。再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度で売電収入を得る。

ただ、本業の太陽光発電関連事業だけでは雇用創出効果が限定的だ。そこで夏から野菜生産や研修事業に乗り出す。発電所の保守などの要員も含めて約50人を雇用する。


グローバル・リンクは廃校などで太陽光発電や農業、教育研修の事業を始める

グローバル・リンク　子供向けに研修

カンメン　農業・味噌づくり

作物はサツマイモのほか、太陽光パネルの下の空間を使った葉物野菜の水耕栽培やシイタケ栽培を予定する。研修は数日間の宿泊型で、自然体験をしながら英語を使い、国際感覚も養う。

大子町は観光名所の袋田の滝などで知られるが、1950年に4万4千人いた人口が現在は約1万9千人。減少を食い止めるべく企業誘致に本腰を入れ始めたが、工業団地や高速道路はない。町は「あるものを生かす発想」（企画観光課）で廃校などの町有地や民有地の紹介を昨年始めた。

校舎を使えば初期投資が抑えられる点をPR。10カ所近い候補地の大部分で利用者が決まった。

太陽光発電設備の施工などを手掛けるカンメン（京都府宇治市）も進出企業だ。大子町出身の井上馨社長（61）は母校の旧下野宮小を購入してシイタケなど農産物を栽培して加工・販売する事業を春以降に始める考えだ。校舎を加工・出荷場にして味噌などもつくる。井上社長は「原子力発電所事故による風評被害を払拭したい」と話す。

体育館や教室は生涯学習や催しで活用。屋上で太陽光発電も行い、運営費の一部を賄う。運動場は近くのJR下野宮駅の利用者向け駐車場やヘリポートとして開放する。

町はさらに県北で盛んな林業に関連した製材工場の誘致を狙っている。来年度は候補地を一段と増やし、企業進出を仲介した個人や事業者に報奨金を出す制度も始める。「誘致は人のつながりが決め手になることが多い」（担当者）ためだ。

人も誘致する。総務省の人材派遣制度「地域おこし協力隊」の枠組みを使い、町に住み込んで働く都市住民4人を募る。リンゴや茶、コンニャクといった特産品や遊休施設を使い新規事業に取り組んでもらう。2月2日の現地説明会は10人近くが申し込んでいる。これらの動きに町商工会の川井憲会長（67）は「山奥に来てくれるのはありがたい。外部の発想が刺激になる」と歓迎する。

誘致担当の町企画観光課の皆川敦史係長（40）は「町の特性に合った事業や人を呼び込みたい」と話す。企業誘致は多くの自治体の願いだが、条件が不利でも幅広い業種を視野に地域特性を生かしながらPRすれば可能性は広がりそうだ。

（水戸支局　大林広樹）

北関東フォーカス

建機メンテ内製化

ニッパンレンタル　営業所に機能

建設機械レンタルのニッパンレンタルは建機の整備工場の機能を持たせ、周辺の営業所の機械をそれぞれメンテナンスできるようにする。

足元の公共事業の増加や企業の設備投資意欲の復活で建機の需要は急増

建設機械を置く営業所に整備工場の機能を持たせ、理を自社でまかなえるようにする。費用を抑える

新潟県や埼玉県でも中核拠点に同様の機能を持たせ、周辺の営業所の機械をそれぞれメンテナンスできるようにする。

カレー風味のしょうゆ

正田醤油、新たな市場開拓

健康志向の高まりや高齢化で国内のしょうゆ市場が縮小する中、同社は特

うゆ）」を2月13日に発売する。甘口のカレーを意識した味付けで、子供

ひたちなかで干しイモの祭典

きょうから2日間

茨城県が全国一の生産量を誇る干しイモをテーマにした催しが18、19日、同県ひたちなか市内の大